

加納 喜光 著

『風水と身体——中国古代のエコロジ』

「あとがき」から本を読むというのは、書を評するもののた息な手段である。著者が全編を書き終えて安堵の時に述べた本音を知ることができるところである。『風水と身体——中国古代のエコロジ』の著者も「あとがき」で素直に全体の構成や主意を明らかにしている。著者は研究の見取り図を示し興味の対象とその過去の遍歴を述べて、この書がエコロジと医学、風水と身体、さらに詩経が軸となって構成されていることをいつている。

内容は過去の雑誌や講演の文章を集めたものである。文章は、中国哲学や医学史の研究者でないとい理解が難しいものもあつたり、一般の読者でも十分理解できる容易なものもあつたりと少しばらつきがあるが、その軸はしっかりしている。著者の環境に関する考え方や身体についての認識が随所に表されている。

第一章「中国古代のエコロジ」は、深く豊かな教養と鋭い哲学的な直観による推論によつて、身体とエコロジの関係が明らかにされる。その論理は、演繹的でもある。環境破壊に対して戦国期の知識人の取つた三つのタイプ、環境あるいは国土改造を肯定する立場、自然あるいは環境に手を加えることを一切拒否する立場、その折衷派の立場の三者を規定して、それぞれの立場を史話や伝説で説明する。また般周か

ら漢代に至る環境破壊について、『淮南子』を視点にすえて古代のユートピアの環境が五元素の浪費によつて引き起こされたと述べている。この『淮南子』の思想は、著者の環境に対する考え方と共通の認識であることを明らかにされている。

第二章「エコロジと風水」は、風水と身体の関係が明らかにされる。まず身体の風景は宇宙のミニチュアでもあつたと述べている。地理上の十二経水と経脈の対応は、水の流れと気の流れとに見いだせるというこらしい。漢字学者としての著者は、風と水にも意味論からさらに発展して厳密な概念設定をされている。最後に風水の「蔵風得水」が母胎回帰願望と関係があるとい推論を展開されているが、さらに深い論説を聞きたい気がする。

第三章「エコロジと中国医学」では、治水と治病の理論のアナロジによつて、中国医学の論理が明らかにされている。この流れの思想、流通と閉塞の論理は中国古代文明のエコロジ体験の中からつかまれた思想であつたと結論されている。続けて中国医学の気について述べられている。漢字学者として気をどのように把握するかという作業がなされる。過去の研究と文字学的解釈、さらに歴史的に発展する意味論的解釈から思想としての気はまだ論究されている。さらに気と血、風と病因論などを述べて、病理の思想はどこかが塞がると病気になるという考え方にあるといふ。その治療法は気血の調和という考え方に尽きると単純化されている。すべての調和といふ提言は、今日の針灸の臨床医学にたずさわるも

のとして、すでに見失っている中国医学の真髄を突きつけた気がする。

第四章「身体と中国医学」は肉体の形をあつかっている。完全な肉体を求める思想がどこにあるか。多くの古代の内臓図である内景図を通じて、中国における解剖の意味を明らかにされる。とくに脳の局在を、中国ではいつから認識されていたのかを論究されている。この問題は最近中国医学史だけの問題だけでなく、思想史上の問題となっている。著者がここで一つの見解を示されたことは、今後のこの分野の研究の一つの方向性を導かれたといえる。

中国の人生観の一つといていい不老不死について、石薬の流行を通じてその思想が明らかにされる。とくに鉱物薬による中毒の影響が唐代皇帝まで廃れない永生願望の心理を異常といわれる。最後に華岡青洲の麻沸散を通じて、華陀の外科学と麻沸散を検証されている。麻の麻酔薬としての作用を論じて、大麻の薬物的認識から麻酔・麻痺・麻薬などの語ができたとする語源説は、検討の余地があると述べられる。

全体としてこの書は、中国古代の思想書であり、環境と肉体の持つ関係を明らかにされたものである。さらに著者は中国古代の賢者の寓話を引いて自らのエコロジーを展開されている。中国医学史を研究するものにとって、この書は啓発と回帰に満ちている。前著『中国医学の誕生』とともに、医学史の研究者だけでなく針灸や漢方の臨床家にもぜひ薦めたい著作である。

(猪飼 祥夫)

〔大修館書店、東京都千代田区神田錦町三―二十四、電話〇三―三二九五―六二三二、平成十三年十二月十二日、A五判、一九九頁、本体一六〇〇円〕

訂正

第四十八巻第一号に作字の誤りがありましたので訂正致します。

八三頁七行目、八五頁一五、一六行目、八八頁一六行目、八九頁一行目

寮↓窓